

会議録

会議の名称	第2回 加東市配偶者等暴力対策基本計画策定委員会
開催日時	令和3年12月1日(水) 13:00~14:35
開催場所	加東市役所3階302会議室
【出席及び欠席委員の氏名】 〈出席委員〉9人 ・海野千畝子 ・岩崎吉泰 ・神崎壽福 ・安達満 ・茂木美知子 ・田中和宏 ・藤原哲史 ・藤原文子 ・石田れい子 〈欠席委員〉1人 ・藤井公子	
【出席した事務局職員の氏名及びその職名】 ・健康福祉部福祉総務課長 近澤 孝則 ・健康福祉部福祉総務課副課長 篠田 玲子 【議題、会議結果、会議の経過及び資料名】 1 議題 (1) 第3次加東市配偶者等暴力(DV)対策基本計画に係る意識調査の結果及び分析についての検討 2 会議結果 (1) について 第3次加東市配偶者等暴力(DV)対策基本計画に係る意識調査の結果及び分析について報告しました。 3 会議の経過 別紙「令和3年度 加東市配偶者等暴力対策基本計画策定委員会(第2回)・会議経過」のとおり 4 会議資料名 加東市DVに関する市民意識調査結果報告書 資料1	

発言者	会 議 の 経 過 / 発 言 内 容
委員長	1 開会挨拶（海野委員長） 2 議 事 [議事録署名人の指名] ・藤原 文子 委員 [議事内容] 議事内容について、事務局から説明を求めます。
事務局	<u>資料1</u>に基づき説明
委員長	事務局の報告を受けて、意見、質問をお願いします。パーセンテージが書いてありますが、実数を計算してみるとかなりの人数がDV被害を受けています。「無職」の割合が20.7%となっているが、コロナの影響があるのでしょうか？
事務局	回答者のうち23.8%が70歳以上の方が占めており、その割合であると思います。
委員長	「無回答」の解釈はどのようにとらえられるのでしょうか？
事務局	調査票配布後、「答えたくない」という方がいらっしゃったことも踏まえ、「書きたくなかった」のではという印象があります。
委員長	「言いたくない」という事であれば、心因として大きなものとなります。60歳代以上では「DV」というのは刺激的なキーワードなのだと感じました。「法律の周知」についてはどのように考えていますか？
事務局	法律の詳しいところまでではなく、まずは言葉や内容を理解してもらうことから始めていく必要があると感じている。周知の方法や手段について考えないといけないと思っています。
委員長	法律に基づいて裁かれることになりますが、60歳代以上の方に「法律がこうなっています」と言っても、すぐに浸透するかどうかは難しいような気がします。 「実際にDVがあったか？」という事をみると、DV被害の数は100人程度いることとなります。この数はすごいなと思います。さらにその中で「子どもが知っているか？」という項目から見ると、80人程度は見ていることとなります。面前DVは「心理的虐待」となる可能性があります。 しっかりと回答してくれた方々に私たちは何が出来るのかというメッセージをいただいたような感じがします。 「相談しなかったのはなぜか？」というところでは、「相談しても無駄だと思ったから」といった点については、私たちが何とかするべきところなのかなと思います。 高校生については、私もきちんと見定めていませんので、意見を差し控えたいと思っています。

委員	デートDVについては、授業がコロナで中止になっている学年があるのではないかと思います。 WEBでの回答割合がどのくらいあったのか教えていただきたいと思いました。 「暴力があった」という回答については、40歳～50歳の現役世代が多い印象があるので、それはスルー出来ない問題だという事が1つあります。もし、自分の子どもがそういう被害にあったとしたらという前提で考えるとそれは他人事ではないはずです。自分の子どもや孫がそういう被害にあったときに、お父さんお母さん達にどういう言葉をかけられるかによってずいぶん支援が変わってくるので、逆にその年代（60歳代以上）はもういいよねという事ではないと思っています。
委員長	法律からだけではなく、科学的な根拠（DVが脳に与えるダメージ）を示していくことも工夫の一つではないかと思っています。
委員	「誰にも相談できなかった」という回答の数字の多さにびっくりしています。こういう状況だからこそ、いつまでも終わりのない問題として残っているのだと思います。 「子どもがいるから別れなかった」という回答も大きなパーセンテージになっています。これは親御さんの一方的な考えのような気もするので、子ども側の気持ちを踏み込んで考えた時にこういう問題が一つずつ解決されていくのではないかと思います。 「あなたが暴力を受けていたことを子どもが知っているか？」の問で35.5%が「知っていたかどうか分からない」という回答があったことに疑問を感じる。その数字は「知っていた」にプラスして考えてもいい数字なのではないかと思っています。ある子どもが「本気じゃないもん 浮気だもん」という言葉を発した事を考えた時に、大人が考えている以上に子どもたちはいろんなことを考えているという事を理解していかないといけないと思いました。
委員長	何かアイデアはありますか？
委員	「いつでも駆け込めるんだよ」という言葉が街にあふれていれば良いと思います。 「ここに連絡してね」とか「通報することは何でもない」「ここに電話しなさい」と軽く言えるようなシステムがつくれたら良いと思います。前回の時に予算の問題があるという話があり、正直言ってエネルギーが落ちてしまったのですが、どこかで本気にならないと私たちのこの問題は絶対解決できないのではないかと感じています。
委員長	「相談するのは恥ずかしい事ではないよ」ということがキャッチフレーズになっていると思いますが、私たち日本人は恥の感情というのがすごく大きく、その恥の概念があるからこそあまり大きく自分たちを主張しないでいることが美德とされた日本人というのが歴史的にあるので、少しそこから1歩挑戦して「頑張るばかりがよいのではないんじゃないか」「無理をしないで助けを求めることが実は誇りにつながる」という何か明るく感じられるような信頼に繋がるキャッチフレーズのようなものを散りばめていくことができればと思います。
事務局	補足になりますが、今年度調査を行い、この調査結果をもとに来年度から計画を作っていきたいと思っています。その中で委員の皆様からご意見をいただいて、次の計画をつくっていきます。予算の話がありましたが、例えば次の計画の中で計画の中にこういう方向でやっていくと謳うと、それに基づいて予算をつけていきますの

	で、決して予算がないから進まないということではなく、ある程度の方針ややり方が計画の中で示されると、それに基づいての予算を計上していきたいと思っています。来年度以降の計画策定の時には新しいアイデアも出していただきたいと思います。
委員	「誰にも相談しなかった」というところが半数以上で、「相談するほどのことではなかったと思った」という回答が意識の違いかなと思います。それに基づいて「相談窓口の周知を図る」というところで、先ほど事務局の説明にありましたように、ただ対面式だけの相談窓口ではなかなか周知しきれないとのことで、相談窓口をインターネットやSNSといった違う方法でも広げて行こうとされるということでした。一定的な相談窓口ということだけではなく、先ほどから皆さんからも意見が出ていますように、若い方に相談窓口が広がるような方法も必要だと思います。年配の方には対面がよいということもあるので、いろいろな方法で窓口を広げてよいという思いもあります。 やはり大人の暴力を見ていた子どものケアを行っていく必要があるということを感じました。大人だけではなく子どものケアも何かの形で知って、考えていくということも必要ではないかなと思います。
委員長	ありがとうございました。
委員	コロナに関して外国に比べて日本では罹った人が悪いという意識があり、そのため全部自律的であると思ったのですが、同じようなことが先ほどから出ていたが、日本人の感覚で「自分にも悪いところがある」という捉え方をしているので、相談しにくいというのが日本社会かなと思いました。 この回答の中で、若い世代ほど回答率が下がっているのですが「自分とあまり関わりがない」という捉え方とか、「子育てで忙しい」といったことで少ないのかとも思うのですが、先ほども意見がありましたが、「これまで過去にこのようなことがあったので回答したくない」ということで、重大なことが潜んでいなければよいのだと思いました。 昔の映画では、独裁的で暴力的な面もあったと思うが、今はずいぶん変わったように思います。長期的に取り組む教育・啓発という部分と、短期的・重点的に取り組むことに分けて、これから取り組み続けていかなければいけないと思います。やはり敷居が高いのであれば、普段のネットワークとか子育ての相談の中で、敷居が低い相談方法を周知し、未然に防げるように情報を共有していく体制を作っていくことも大切であると思いました。どうしても重大なことが起こってからだと、敷居が高いとか知らない人のところには相談にいけないと思います。啓発するにしても一律に捉えるのではなく高齢者に向けた啓発の仕方とかそれぞれの世代に応じた形で進めていく必要があるとアンケートを見て思いました。
委員長	ありがとうございました。いろいろな視点からのご意見をいただきました。
委員	たくさんの意見が出ましたが、私も頷くことばかりでした。この調査票の質問が、過去の事か？現在進行形の事なのか？と思って見ていました。それと同時に、結果的に被害に遭われ、そして悩まれる中で、本人自身が何とか受け止めようとされながら結果的には相談に至らなかった、いろいろな葛藤がその中であったらと思います。結果的に誰にも相談できなかったという苦しい状況があるのだということをしみじみ感じながら見ていました。その中で、これからは今後の取り組みということも大事だという話がありましたが、世代別に対応することもそのとおりだと思

	います。高齢者世代はシニアクラブとか、中学生などは学校でそのような学習の機会をつくっていただけますが、私たち大人になるとそのような機会がなかなかありません。自分から行こうとしなければ機会がないというところもあります。しかし、地域の中には消防団や婦人会といったいろいろな組織がありますので、出前講座的な活動も含めて、「相談することで救われたことが本当にあるんだよ、だから相談することが大事だよ」という発信を、いろいろな機会や場面でできることを考えていけばよいと思いました。
委員長	ありがとうございました。
委員	様々な問題の中にデートDVが潜んでいる可能性もあります。なぜかと言うと、私もSNSは詳しくないのですが、結局SNSのゲームか何かで知り合った男性のところへ家出してしまい、そこで体の関係を持ってしまう。さらに性行為の場面を動画で撮られて拡散されてしまいます。それらをいわゆるデジタル性暴力というのですが、そのような形でデートDVが広がっているという事実があります。それを高校生たちがDVという認識があるかという、全くありません。 加東市で、中学校3年生でデートDVの授業をされるという話がありましたが、そのようなことを続けていくことが大事で、それが大人になって結婚した時や今後の人生にも活かされてくるので、子どもの時からのそのような周知というのはとても大事だと最近の事例を見ていて感じているところです。
委員長	きちんと表現された時に、この表現のどこにDVが隠れていたのでしょうかといったクイズ形式のようなもので、そのような意識を少しでも興味を持ちながら自分でわかってもらいたいという思いはあります。SNSに頼っていくと行き着くところがやはり家出とか性的な暴力の餌にされるということがとても多いです。子どもたちが、このようになるかもしれないという見通しやストーリーを持つことができればよいと思います。自分のペースで少しずつ自分の人生を振り返っていくことから、時には感情を出すことも大事で、泣いたり怒ったりすることも大事なんだということが、我々の普通の生活の中でも表現されていけるような文化がつくられていけば良いと思いました。
委員	若い人が自分の親御さんの相談をするケースがあり、それは自分が気づいたり学んだりあるいはデートDVの相談をする中で気づいたのだろうという感じがしていますので、教育はとても大事だと思いました。 子どもは気づいていないのではないということに同感で、やはりこのようなデータの中でそこに丸をつけていたのですが、そのあたりをきちんと見ないと、子どもたちは本当に気づいているし家の中の空気が張りつめていることをすごく感じています。 正直「DV相談です」と言ってくる人は少ないです。子どもの相談や、何か違うことで相談する中で自分がDVであるということに気づく方がかなり多いです。子育て相談や子どもの相談で、子どもを見ている人が一番よく子どものことをわかっているの、専門相談も大事ですが子育て相談などの身近な相談の中に、DVへの視点を持った方がいるということが実は一番大事かもしれない私は思っています。そうすると繋ぐこともできるわけですから、そのようになればよいと皆さんの話を聞きながら思いました。
委員長	ありがとうございました。

委員	若年層の学生などについてはデートDVという言葉を知っているという率は今年度68.5%になっており、4年前の調査よりも8.4%増えており、社会全体では若年層に対して、デートDVという認識は広がっていると思います。SNSなどが広がって、学校の授業以外からでも情報を入手することができることも増えた要因かと思います。男女問わず学生や若い人に、比較的加害者になりやすい男の人にも、どのようなものがDVにあたるのかということを早いうちから教育をして、常識として今後も継続していけばと思います。また社会の変容で、女性の社会進出、経済的自立が今後進んでいく中で、一度婚姻関係や同棲するという形になりDV等があった時でも、その認識があれば比較的行動が取りやすくなると思います。 「夫婦間でも殴る、蹴るは罪です」ということを、まずはっきりしておかないといけないところはあります。
委員長	少しのアイデアがあることで「頭の中ではわかっているが、トラウマパーツが出てきてやってしまった」ことと、「全然知らないけれども、どんどんやっていいと思ってやった」こととは全く違うと思ったので、「わかっているもやってしまう」という方もかなり多いと思います。それでもやはり「禁固何年だよ」というところまで書いてあると多少の抑止力にはなるのではないかと思います。 警察独自ということとスクラムを組んでやることの両方が必要なのではないかと思います。
委員	相談件数が減っているからといって実際にそういう事案がないということではないと思います。アンケートの中にもありましたが、「相談できなかった」「しなかった」という方がほとんどでした。特に全国との比較では「他人を巻き込みたくなかった」とか「あまり人に知られたくなかった」ということが全国平均よりも多かったようです。相談したい気持ちはあるけれどもできないというところが一番問題だという気がしました。解決する方法は何ですかと言われると、周りから目立たないような形での相談の方法、SNSの利用で、相談できる窓口を増やしてほしいという希望が出ています。「悩まれている方はどんなことでもよいので相談する方法がこんなにたくさんあります」と周知できればいいと思います。 表に出る前に相談できる何かよい方法があればと思います。もちろん親御さんのご親戚とか友達とか会って相談できるような人がいれば相談されていると思うのですが、おそらく核家族の中で相談することもできないとか、そういう方が多いのではないかと思います。DVがなくなるということはないと思います。それを未然に防いで、できれば、子どもさんがいるので我慢するのではなく、子どもさんのために夫婦が仲直りするとか理解を深めあい生まれ変わるとか、そういうきっかけにするような相談窓口や方法をつくっていただければと思っています。
委員長	段階があるのだと思うのですが、まずは勉強のような形だったり、家の中でも家庭内別居のような形で距離を置いて、トラウマパーツが出てくる時は相手の話を聞くことをしないとか、距離を取る回避行動から始めるしかないのかと思います。それでもしつこくいろんなことが起きてきたら、もう別居するしかないです。そこで複雑なのは、子どもさんの喪失感を感じることです。想定することは、この子にはお父さんがいなくなるのではないか、この子にはお母さんがいなくなるのではないかということが、父母それぞれにとって、一番自分が我慢しようと思うことになります。もしかすると、ずっと一緒にいなくても夫婦でいるんだという発想の転換をしなければいけないのではないかと思います。
事務局	WEBによる回答は、176件ありました。

委員長	何割になるのですか。
事務局	約11%がWEBでの回答になります。
委員長	確か相談窓口もアンケートと一緒に送られたのですよね。
事務局	リーフレットを一緒に送っています。 いろいろご意見ありがとうございました。来年度計画の策定を考えていますので、その時にもどんどんアイデアをいただきまして、それが計画に載ることによって本当に予算がついて実現すると思いますので、今後もよろしくお願いいたしますと思います。
委員	ありがとうございました。この結果をもとに計画策定を進めていくということになります。 以上で議事を終了します。進行を事務局にお返しいたします。 3 その他 4 閉会あいさつ（岩崎副委員長）

令和4年 / 月25日

委員長

海野千歌子

署名人

森原文子